

## 特集 『森山威男 スイングの核心 ——1970年代日本におけるフリースジャズの創造』によせて

松原隆一郎

アメリカで黒人奴隷たちがヨーロッパ発祥の楽器を用いつつ生みだした音楽を元に1900年頃に成立したジャズは、デキシード・ジャズ、スイング・ジャズ、第二次大戦前後にはビバップ、ハードバップ、クール・ジャズ、ヒュージョンとめまぐるしく様式を変え、今日に至っている。日本でも昭和以降、盛んに取り入れられ、ショー文化・ダンス文化を生み出したが、日米開戦をもって抑圧された。その経緯は瀬川昌久・大谷能生『日本ジャズの誕生』(青土社、2008)に詳しい。そして日本のジャズは戦後いち早く息を吹き返し、米兵として来日したミュージシャンから数年間の遅れを素早く取り戻したとされる。

けれども日本人ミュージシャンが演奏の様式まで革新するには、1960年代後半の富樫雅彦や佐藤允彦、そして山下洋輔トリオらによるフリースジャズ創生期まで待たねばならなかった。フリースジャズはジャズの基本であるフォー・ビートやコード進行を解体しようとする運動であり、ヨーロッパにおいてはクラシックにおける前衛の受容、アメリカにおいてはアフリカ回帰といった経過を見せたが、日本のそれはいずれとも異なる特異な展開を辿った。

とくに1974年6月ドイツの第3回メルスジャズ祭に登場した初期山下洋輔トリオ(山下洋輔pp、森山威男ds、坂田明bcl、as)は、当時の最高位に位置づけられるほどの演奏を繰り広げた。ところが森山威男が翌1975年をもって退団し、このトリオは現役時に動画を残さなかった。そのためクラシックのように譜面もなく、フォービート・ジャズのようにビートもない音楽が、いかなる原理にもとづいて構成されていたのか、また実際にどのような演奏されたのかも、謎に包まれたままとなった。ヨーロッパのジャズ界を震撼させたにもかかわらず初期山下トリオの演奏様式は誰にも受け継がれず、世界のジャズ史における一種の「ミッシング・リンク」となったのである。

科学研究費基盤研究(C)「森山威男のフリースタイル奏法のデジタルアーカイブ作成および対話を通じた分析と考察」は、2014年から3年間の研究成果として、森山威男自身が初期山下トリオ時代のドラミングを解説し、撮影した。また山下洋輔・坂田明とのデュオも各々を動画として収録した。

アメリカ太平洋地域研究センターは2016年11月20日(日)、東京大学駒場キャンパス18号館1階ホールにおいて、「森山威男 スイングの核心——1970年代日本におけるフリースジャズの創造」と題しその映像を上映、併せて関係者によるシンポジウムおよび森山威男による実演を公開した。

プログラムは第Ⅰ部 上映(13:30~15:00)、第Ⅱ部 シンポジウム(15:15~16:45)、第Ⅲ部 演奏(17:00~17:15)。シンポジウムの登壇者は松原隆一郎(東京大)、長谷部浩(東京藝大)、マイク・モラスキー(早稲田大)、そして森山威男である。演奏は森山威男(ds)

と渡辺ファイアー (as) が行った。

第1部の動画について、内容を紹介する。全体の構成は「序」、「第1部 模索」、「第2部 完成」、「第3部 interplay」、「第4部 実演」、「第5部 証言」(山下・森山対談、坂田・森山対談)から成る。

序ではまず世界最大のフリージャズ祭であるメールス・ジャズ祭において1974年の第3回に登場した山下洋輔トリオの公演がいかに大きな成功を取めたのかを、ライブ音源「clay」とともに紹介する。山下トリオの演奏は一定のリズムを明示せず、しかし圧倒的な「スイング」を感じさせる点が、フリージャズ界において他とは一線を画していた。そして森山威男がこの演奏の1年半後の1975年末に山下トリオを脱退、以降は現在に至るまでフォービートの演奏を行ってきたため、いかなる原理であるかの圧倒的な演奏が構成されたのか、理解する鍵は永遠に失われたかに思われてきた。本動画は、北千住の東京藝大スタジオにおいて、山下・坂田とともに編み出した特異なフリースタイルにつき、森山威男が質疑を重ねるなかで技術を言語化し解き明かすものである。

第1部では、1964年に藝大打楽器科に入学、一流交響楽団への入団が決まっていたにもかかわらずジャズへ活路を求めた森山が、山下洋輔との出会いにより自分の居場所を定めた経緯が述べられる。クラシック音楽と訣別し当初はフォー・ビートから出発したものの、次第にビートは自由になり、山下洋輔が病欠から復帰した1969年2月1日、山下・森山デュオでフリージャズに突入することとなった。先んじてフリージャズへ歩みを進めつつあったJ. コルトレーン楽団におけるE. ジョーンズのドラム演奏を念頭に、スイング感を保ち続けるフリーフォームを模索した過程が回想されている。

第2部では、森山のドラミングにおける「4つの原則」が示される。「シンバルからバスドラムまで、ドラム全体がいつも鳴っていること」、「シンバルは連続したビートはあるが、一定のテンポは感じさせないということ」、「トップシンバルを支えるように空間を埋め、任意の場所にアクセントを打ち込むこと」、「強弱の抑揚をつけ、演奏全体でうねるような動きを出すこと」である。以後、ドラムでの実演を交えつつ、解説が加えられている。

ポイントとなるのは、シンバルには連続したビートがあるものの一定のテンポを感じさせない工夫である。森山はその鍵として、「2と3の組合せ」があったと説明する。ジャズは3連音符、マーチやロックは2連音符を基本とするが、2と3がランダムに出ればリズムは2でも3でもなく聞こえるだろうという考え方である。

第3部においては、対人の演奏においてフリージャズをいかにスイングさせたかが解明される。トリオにおいては、相手のリズムは3かもしれないし自分は2かもしれない。スイング感は、一定のテンポがある時にはその裏を打つことで得られる。それに対し山下トリオは、「間を置くこと」、「合図に対しよう反応するという取り決め」、「空白の設定」によってスイング感を生み出した。ここは3だとか、ここは2だと思った瞬間にそのフレーズを出すと、相手の予想とは外れることがある。それにもかわからず毎日演奏を重ねると、徐々に分かり合えるようになってゆく。その台本を書くのが森山の役割であった。

続く第4部では、山下・森山、坂田・森山のデュオを収録した。彼らのフリーフォームでの演奏は、2011年の日比谷野音での記念公演のみ動画として残っている。しかし長時間の公演では、かつての瞬発力は実現できていない。また正面からの撮影が主であったため、視線での合図をとらえることができていない。そこで本動画では、1曲2分を上限と

して、40年前と同等の強度による演奏を再現した。とくに森山・山下デュオにおいては、視線で呼吸を合わせていることを確認するため、両者の視線上にカメラを置くこととした。曲目は以下の通りである。

「グガン1」、「グガン2」、「ミナのセカンド・テーマ1」(以上、山下・森山)、「グガン3」、「クレイ」、「ミナのセカンド・テーマ2」(坂田・森山)。画像であるにもかかわらず、上映した会場では大きな拍手が湧き起こった。映像が待たれていた証しであろう。

第5部の対談において山下は、ヨーロッパのフリージャズと山下トリオの相違につき、森山とほぼ同意見を開陳している。また1970年前後には、筒井康隆や赤塚不二夫らの支えがあり、彼らのスタイルが確立されたことも付け加えた。山下トリオのフリージャズは、ジャズの一部というよりも、サブカルチャーとして受容されたのであろう。

坂田は、広島でのコルトレーン来日公演に接したことからプロを目指したという。その体験を始め、山下トリオにおける「間」の重要性がいまなお欧米では理解されがたいものであることを証言した。「間」は、歌舞伎において演者間に成立するものに似ており、演者と観客の間では厳密には成立困難であることも付け加えられた。

第Ⅱ部のシンポジウムにおいて、松原は本研究が成立した経緯と動画収録の背景・手順を説明した。東京藝大で採択された基盤研究(C)の代表者である長谷部は、歌舞伎の中村勘三郎と坂東三津五郎に長年寄り添ってきた体験をもとに、山下トリオにおいて森山が編み出した「間」の技術を惜しげもなく公表することの意義につき説明した。1970年代の山下洋輔トリオ周辺のジャズ文化に詳しく、ピアニストでもあるモラスキーは、「スイングを捨てた」と思われてきたフリースタイルにおいてスイングを核に置くということの意味を確認し、また森山が同時代の先駆者である富樫雅彦をどう見ていたのか聞いた。森山は、観客からの技術的な質問にも答えつつ、動画収録を終えた心境を述べた。また日本のフリージャズ史において最大の謎である「なぜ絶頂期において山下トリオを脱退したのか」についても、「突然に有名になることが怖かった」と誠実に答えた。

第Ⅲ部では、現在の森山グループのレギュラー・アルト・サクソ奏者である渡辺ファイアーとともに、森山はフリー・フォームでの「キアズマ」「ミナのセカンド・テーマ」、フォー・ビートでの「グッバイ」等を熱演した。観客からは「荘厳な演奏だった」というコメントが寄せられたことを、主催者の一員として報告しておく。

最後に、動画作成にあたり協力いただいた多くの方々、なかでも音響の亀川徹教授(東京藝大)、撮影・編集の高井浩司氏には感謝申し上げます。また、研究を公開する機会を与えていただいた東京大学にも御礼申し上げます。

本映像は、科学研究費助成事業・基盤研究(C)26370159「森山威男のフリースタイル奏法のデジタルアーカイブ作成および対話を通じた分析と考察」の成果である。